

幼児期における 環境教育体験活動事例集

～ 環境教育で持続可能な地域へ ～



はじめに

環境教育の推進においては、幼児期からその発達段階に応じて、あらゆる機会を通じて環境の保全について理解と関心を深めることが重要であるとされています（環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律（通称、環境教育等促進法）第9条）。特に、幼児期の環境教育では、生きる力の基礎を培う時期として、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることが重視されています。

近年、全国的に幼児期の自然保育活動を行う民間団体が増えています。また、多くの地方公共団体において、自然を活用した保育や幼児教育等を支援する取組が進められています。環境省は、これまで体験活動の種類に注目した優良事例の収集・発信を行ってきましたが、本事例集では、新たに幼児期又は保育の特性に着目して、参考となる優良な自然保育・自然体験活動の事例をとりまとめました。作成に当たっては、NPO 法人森のようちえん全国ネットワーク連盟及び森と自然の育ちと学び自治体ネットワークに御協力をいただきました。

事例を通して、幼児期の自然保育・自然体験活動は、環境教育としてはもちろん、地域の自然資源の活用により、地域社会の価値・活力を高め、地域における諸問題の解決にも効果が及んでいることを感じていただけるものと思います。

本事例集が、幼児期の環境教育の充実や、持続可能な活気ある地域づくりを推進する一助になれば幸いです。

令和2年3月

環境省大臣官房総合政策課環境教育推進室

幼児期における環境教育体験活動事例集

～環境教育で持続可能な地域へ～

目次

事例掲載

① 自治体による自然保育の推進事例

- 豊かな自然と温かな地域の中で、子どもたちの“人生の根っこ”を育む
信州型自然保育(信州やまほいく)(長野県)* 1
- 「ぎふ木育」における自然保育へのアプローチ(岐阜県)* 3
- 身近な自然で実施できる～東近江市の里山保育～(滋賀県東近江市)* 5

② 都市部での日常型自然保育

- 都市部における保育所としての森のようちえん～まち保育のススメ
(NPO法人もあなキッズ自然楽校)** 7
- 森のようちえんさんぽみちにおける自然保育の実践
(NPO法人ネイチャーマジック)** 9

③ 都市部での非日常型自然保育

- 都心部における非日常型森のようちえん～ノッツ森のようちえん“のあそびくらぶ”
(NPO法人国際自然大学校)** 11
- 子ども家庭支援センターにおける自然遊びプログラムの効果について
(特定非営利活動法人マザーツリー自然学校)** 13

④ 地域交流を伴う自然保育の取組

- 大人も子どもも共に育つ、地域につながる森のようちえん
(森のようちえんウィズ・ナチュラ)** 15
- 『おさんぽ子育て支援』のススメ(一般社団法人new education Little Tree)** 17

⑤ 森林や里山等を活用した自然保育

- 静岡市街地から近距離の里山を生かした
野外保育ゆたかの保育活動(野外保育ゆたか)** 19
- 森と子どもと馬をつなぐもの(NPO法人山の遊び舎はらべこ)** 21

⑥ 都市部と地方との交流事例

- 旅する森のようちえん ～エコツーリズム手法を活用した、非日常型活動
(特定非営利活動法人いぶり自然学校) ** 23
- 認定こども園Fujiこどもの家バンビーノの森における
森のようちえん型サマースクール (認定こども園Fujiこどもの家バンビーノの森) ** 25

⑦ ビオトープを活用した事例

- 「自然遊びで育む生きる力」(枚田みのり保育園) 29
- 子どもの気付きや探求の深まり ～自然との共生から～ (富田林市立錦郡幼稚園) 31

⑧ 社会教育施設、民間企業における自然体験活動

- わかさわん しぜんはともだち ～近隣市町と連携した海の自然体験の機会と場の提供
(国立青少年教育振興機構 国立若狭湾青少年自然の家) 33
- 企業社有林を活用した森の子育て広場「森のhahako園」(森のhahako園) *** 35
- 持続可能な社会を支える人材づくり支援、三富今昔村(コミュニティ・プラットフォーム)
で体験型環境教育 (石坂産業株式会社 三富今昔村 くぬぎの森環境塾) *** 37

コラム

- 全国各地に活動が広がる森のようちえん* 27
- 幼児の自然体験における安全性の確保* 28
- 持続可能な社会の構築と環境教育について 39

下記のとおり、事例の御提供などの御協力をいただきました。

- * 森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク
(正式名称：森と自然を活用した保育・幼児教育推進自治体ネットワーク)
- ** NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟
- *** 「体験の機会のある場」研究機構

自治体による自然保育の推進事例

豊かな自然と温かな地域の中で、子どもたちの “人生の根っこ”を育む信州型自然保育（信州やまほいく）

長野県（県民文化部こども・家庭課）

<https://www.shizenhoiku.jp/>（信州やまほいくの郷ホームページ）

自然保育推進の背景

地域の環境や状況

長野県は全国4位の広大な県土を有し、その約8割が森林である。また、多様な地域性（村の数は日本一）や、自然環境を活用した屋外での体験活動を積極的に取り入れている野外保育団体（森のようちえん等）が全国で最も多く存在するなど、子どもの豊かな体験活動に適した環境が整っている。

取組の経緯・背景・沿革等

平成27年4月1日、信州の豊かな自然環境と多様な地域資源を活用した、屋外を中心とする様々な体験活動を積極的に保育・幼児教育に取り入れる園を長野県が独自に認定する「信州型自然保育（信州やまほいく）認定制度」を創設し、現在、信州やまほいく認定園（以下、「認定園」）は210園を数える。

制度を通じて自然保育の社会的認知や信頼性と質の向上を図るとともに、県内の保育・幼児教育に携わる方々が積極的に自然保育に取り組んだり保護者が安心して子どもを託すことができる自然保育環境の充実を目指している。

自然保育推進の具体的取組

信州型自然保育認定制度の認定基準は、安全管理や保育者の資質等に関する24項目からなる。認定の種類は、「特化型」（週15時間以上の屋外体験活動）と「普及型」（週5時間以上の屋外体験活動）の2種類を設けており、一日の大半を自然の中で過ごす「特化型」のほか、他のプログラムと一緒に自然保育にもバランスよく取り組みやすい「普及型」を設定している点が長野県の制度の大きな特長である。

制度創設に伴い、長野県では「人材育成、情報発信、財政支援」の3つの柱を掲げ、認定園の運営安定化や保育人材の確保等を積極的に支援している。

人材育成については、長野県が主催する自然保育研修交流会（年3回程度）を開催するほか、希望する認定園に対して自然体験活動の専門指導者を派遣する事業等を行っている。情報発信については、自然保育ポータルサイト「信州やまほいくの郷」を開設し、認定園の保育事例を掲載するほか、長野県の取組を紹介するセミナー等を定期的で開催している。財政支援については、公的支援のない認定園を対象とした人件費の助成や全認定園を対象とした自然保育活動のフィールド整備（整地、伐採等）費用の補助に加え、幼児教育無償化の対象とならない、認可外保育施設を利用する「保育の必要性の認定」のない世帯を対象とした保育料の助成事業を行っている。

自然保育の紹介

🍂 認定園(公立保育所)の活動事例

「しぶいて？」どんな味？

11月、散歩に出ると、あちこちに色づいた実を付けた柿の木を目にする。

絵本でもおいしそうな柿を見ている子どもたちは「ほいくえんのかきもたべてみたい！」と言い出した。担任は渋柿と知っていましたが、口にしてみることに・・・

「なにこのあじ!」「くちのなかが、しわしわになる!」との声が上がリ、子どもたちの中に、保育園の柿は食べられないとの思いが広まったのか、みんなシュンとなってしまった。それでも諦められず、絵本を眺め、担任にあれこれ聞いていた。そして口の中がしわしわになるのが渋味ということ、「渋柿・甘柿」があること、渋柿を甘くする方法もあることを知った。話すうちに一人が「うちではおさけかけてるよ!」と言い出したが、さすがにアルコールは使えない。「れいとうしよう!」一カ月の冷凍作戦を選ぶこととなった。

そして一か月後、冷凍庫から出して恐る恐る口にしてみると・・・

「あまい!」「おいしい!」大成功であった。

1人男の子が、皮ごとがぶりっ!「ぐえ～、しぶい・・・」
(笑)皮までは甘くならなかったようだ。



「しぶい」という感覚を味わった子どもたちは、保育園の柿は食べられないとの思いに。そこで終わらずに同じ柿を甘くすることができるという環境の変化を学んだのである。野には、加工品にはない中途半端な味がある。知らないままに育つより、様々に体験したことがあるって素敵だ。

取組の効果

子どもたちが何かをやってみたいと言い出した時、保育者が見守りながららせてみると、自分たちであれこれと工夫して一つの遊びが深まっていく。屋外での体験活動の中で、たくさんのことに気付いたら、それを伝えてもいいと分かってきた子どもたち。子どもの数だけ興味対象があるといえる自然の中で、どんどん自分の好きなものを見つけ、もっと知りたがるようになってきた。認定園からは、このような声が多く聞かれる。

保育者の方からは、信州やまほいくの認定を、主体的な遊び・学びを助けるツールの一つと捉えていただいている。認定を受けたことで保育そのものは大きく変わらないとしても、認定を契機として園全体で今まで気付かなかった自然環境を意識し、主体的な学びにつなげていく姿勢が生まれている。

自治体による自然保育の推進事例

「ぎふ木育」における自然保育へのアプローチ

岐阜県（林政部恵みの森づくり推進課）

自然保育推進の背景

地域の環境や状況

岐阜県は、御嶽山、乗鞍岳など標高 3000m を超える山々が連なる飛騨地域、木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川が流れる美濃地域があり、県土面積の 82% を森林が占める全国 2 位の森林県である。起伏に富む地形や標高差から生み出される多様な気候の影響を受け、自然が豊かで様々な種類の動植物が生息している。

取組の経緯・背景・沿革等

岐阜県では、平成 18 年 3 月に「岐阜県森林づくり基本条例」を制定し、県民や次代を担う子どもたちを対象とした「森林環境教育・木育」を進めてきた。平成 25 年 3 月には「ぎふ木育 30 年ビジョン」を策定し、森林に代表される岐阜県の豊かな自然や、それに影響を受けて育まれてきた伝統と文化に誇りを持ち、「清流の国ぎふ」を担う子どもたちの育成に取り組んでいる。

その中で幼児期から森林空間を利用した自然保育活動については、「ぎふ木育」の一環として支援を行っている。

自然保育推進の具体的取組

「ぎふ木育 30 年ビジョン」では、「ぎふ木育」を「県の豊かな自然を背景とした森と木からの学び」と定義づけしており、「森と木」その両方から自然保育にアプローチしていること、そして「30 年」という長期的かつ継続的な施策であることが、このビジョンの重要なポイントである。自然保育というと森や公園といった野外での活動を主体としているが、本県では、「木のおもちゃは掌の中の小さな森」という言葉にもあるように、木のおもちゃを通じて、身近な木に触れ、森を感じ、自然とつながることも自然保育の一つと考えている。

平成 24 年度には、清流の国ぎふ森林・環境税を導入し、保育園や幼稚園、小学校等に指導者を派遣して、身近な自然や木にふれあう体験を行う「ぎふ木育教室」や「緑と水の子ども会議」を実施しており、平成 30 年度までに 781 施設、約 4 万 5 千人が森や木にふれあう体験活動に参加している。平成 27 年度からは、県立森林文化アカデミーと連携し、森のようちえん活動の実践者を対象としたリスクマネジメント研修や交流会を開催する



など、幼児期の森林環境教育を推進するための活動支援を行っている。令和元年度には、森などの自然を活用した子育て・保育・幼児教育に取り組む活動のうち、他の模範となる優れた活動を行う団体・個人を表彰し、その取り組みの推進と県民への認知度の向上を図ることを目的とした「ぎふ 森のようちえんアワード」を創設した。

自然保育の紹介

県内の保育所、幼稚園、子育て支援センターなどに、「ぎふ木育」の専門家である「ぎふ木育推進員」を派遣する「ぎふ木育教室」では、以下の5つのプログラムから選択して実施しており、基本プログラムにかかる講師料及び講師の旅費は県が負担し、材料費については施設の負担としている。ただし、材料費のうち木育教材の購入費について、「ぎふの木育教材導入支援事業」を活用することで、県から補助を受けられる制度がある。

- ① 野遊びウォーク：施設の周辺の森や自然を歩きながら、身近な自然のおもしろさや自然物を使った遊びを学ぶことで、森へ入るきっかけをつくる。
- ② ままごとあそび：木のままごと皿を紙やすりで磨いた後、野外で集めた自然素材を使ってままごと遊びを行い、自由な発想で自然物を捉えるとともに、食事の作法を知るきっかけをつくる。
- ③ 木のおもちゃづくり：ぎふの身近な山の木を紙やすりで磨き、木のおもちゃ（積み木、チョロチユウ等）を作ることで、木の匂い・手触りを感じ、作った後は、みんなで遊んで楽しむ。
- ④ 木の楽器づくり：ぎふの身近な山の木を紙やすりで磨くなど木に親しみながら、楽器（木の笛、カスタネット、祭りの鈴等）をつくる。作った後は、みんなで演奏して楽しむ。
- ⑤ 木のアクセサリーづくり：ぎふの身近な山の木を紙やすりで削り、木のアクセサリー（ペンダント等）を作り、木の匂い・手触りを感じ、それぞれが思いを込めたものづくりを体験する。

これらのプログラムをいつでも体験でき、誰もが木に触れ、親しみ、木のおもちゃ遊びを通じて森を感じる「ぎふ木育」の拠点施設「ぎふ木遊館」が令和2年4月にオープン予定である。

さらに、県立森林文化アカデミーでは、平成26年度にドイツ・ロッテンブルク大学と連携の覚書を締結し、毎年ドイツから講師を招き、森の教育ワークショップや森林環境教育セミナーなどを実施している。また、ドイツの森林教育施設「ハウス・デス・バルデス」をモデルとした、森と人をつなぐための日本初の森林教育の総合拠点施設「森林総合教育センター：morinos（もりのす）」が令和2年5月にオープン予定である。

取組の効果

ぎふ木育教室を経験することで、砂場遊びではデコレーションされたケーキを作ったり、葉っぱが浮かんでいるお味噌汁を作ったりと、自然物を使って楽しむ様子が見られるなど、豊かな想像力が育まれている。

自然の中で遊ぶ子どもたちは、やるべきことに追われず、のびのび活動してる。ルールはあるものの「枠」がない遊びは、子どもたち自身が自分の経験を土台として遊びにつなげたり、広げたり、考え、変化させていくことができるようになったなど実施園から報告があった。

自治体による自然保育の推進事例

身近な自然で実施できる ～東近江市の里山保育～

滋賀県東近江市（市民環境部 森と水政策課（八日市いきものふれあいの里））

自然保育推進の背景

身近な自然環境への限られた接し方に危機感

滋賀県東近江市は、平野部に近畿地方最大の農地面積を有し、森林は市域の56%を占めるなど、身近な所に多くの自然がある。一方で、幼児期の子どもに自然体験活動の機会を提供する時、その種の活動に関心のある保護者の子どもしか参加機会が得られなかったり、活動が、整備された公園や森林等で行われることで、子どもも保護者も、整備された場でないと自然体験ができないと捉えたりするという課題がある。

本市では、子どもの生活圏内に身近な自然があることを活かし、保護者の関心度合いに左右されず多くの子どもが自然を楽しみ、これを通じて幼児期に育った地域に愛着を持ってくれるようにとの思いで、2015年度から里山保育を実施している。

自然保育推進の具体的取組

里山保育の実施手法

本市には、環境省のいきものふれあいの里事業により設置された八日市いきものふれあいの里（通称、河辺いきもの森）があり、年間1万人以上に、スタッフが案内・指導を行うタイプの環境学習を行っている。同森で環境学習のノウハウを蓄積したスタッフが、市内の保育園・幼稚園・幼児園に出向いて、園の近くにある身近な自然に園児と一緒に出掛け、自然体験活動を行うものが「里山保育」である。

本市には、公立・私立を合わせて保育園等が30園あり、いずれは多くの園で里山保育を実施したいと考えているが、園外活動の上では園や保護者の理解と協力が欠かせないため、まずは少しずつ実績を積み重ねていこうと、2015年度に1園からスタートし、2018年度まで毎年1園ずつ増やしながらか実施してきた。1つの園で年間8～10回の活動を行ってきた中で、ある園で年間2回の活動を試行したところ、2回だけでも子どもたちにインパクトがあることが分かったため、2019年度は年間活動回数に2～8回のバリエーションを持たせ、計7園、213人の園児（本市5歳児クラス在園児の20%）に対して里山保育を実施した。

自然保育の紹介

里山保育は、公立・私立の認可園で、主に5歳児クラスの園児に対して、9:30～11:30を目安に実施している。2019年度は、最少5人から最大70人以上の園までを対象に実施したが、いずれの園でも、子どもたちが歩いて行ける距離にある里山や田んぼのあぜ道、水路、社寺林などの身近な自然に出掛け、「探検カード」を持って活動している。このカードは、河辺いきもの森のスタッフが毎回行う下見の際にその時期の自然の状況を把握し、当日子どもたちに見つけて欲しい自然物を図示したも

のである。探検カードの役割は、図示されたものを見つけてもらうためだけでなく、子どもたちの「発見したいと思う気持ち」を喚起するためのツールとして利用している。スタッフは、子どもがカードに図示されていない自然物を発見した場合も大いに誉め、それを他の子どもたちにも伝えることで、発見しようとする気持ちの輪をどんどん広げていく。

この活動を複数回行い、葉っぱの色や草丈の生長、生き物の成長や死などに向き合っていく中で、子どもたちは季節の移り変わりを通じて「この前と違う」という感覚を実感として身に付けていく。自然環境に向き合い、その問題を捉える上で、幼児期から「この前と違う」という感覚を持つことは、極めて重要だと考える。



取組の効果

身近な自然の楽しさを原体験の中に

日々、子どもが主体的に自然と関わって過ごす「森のようちえん」に比べると、1回2時間、年2～8回程度の里山保育の活動密度は到底及ぶものではない。一方、森のようちえんは、子どもの活動に適したフィールドと、それを活かせる指導者の常駐が必要である。また、森のようちえんへの入所が限定的である場合には、幼児期の自然保育に関心のある保護者の子どもしか入所する機会が得られないということもある。

里山保育は、草はらや水路など園の身近にある自然を舞台に、指導者が出向いて実施することで、どの園でも気軽に行え、実施園の全ての5歳児に機会を提供できることに大きな特徴がある。保護者からは、「子どもが活動する〇〇山には今まで関心もなかったが、子どもがあまりにも楽しそうに話すので、初めて一緒に行った。子どもが自信満々に〇〇山の自然を案内してくれた」



などの意見もあり、里山保育が保護者の価値観と行動を変化させたことが分かった。

子どもたちは、今まで「草むら」や「藪」としか認識していなかったところに、とんでもない発見や不思議や驚きが詰まっていることに気付き、それを「楽しい」と感じることで、原体験の中に自分たちが暮らす地域の自然が持つ価値を刷り込んでいく。このことは、少子化や流出人口の増加を憂慮する地方にとって、長期的視点から有効になるのではないかと考えている。

都市部における保育所としての 森のようちえん ～まち保育のススメ

NPO 法人もあなキッズ自然楽校（神奈川県）

<http://moanakids.org/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

区内では、子どもの人口増加率が上位にある「港北ニュータウン」内に位置する。園舎から徒歩5分ほどのところに、周囲13キロある自然緑道がある。造園業者が植樹した木々と、里山だった環境が入り混じることで、季節感もあり、過ごしやすい環境として人気のある町である。一方で、幼児教育への関心も高く、様々な幼児教育機関もある。また、ニュータウンの特徴として若い親同士がコミュニケーションをとり協働していくことの難しさから、育児困難者も見えない部分で増加傾向にある。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

育児困難が増えていることや子どもが外遊びをできる環境が減少していることなど厳しい現実がある中で、日常生活において自然に触れ、自己肯定感を育む自由な遊びの環境を保障することを考え、「未来を創るのは子どもたちだ！」をキーワードに2007年もあなキッズ自然楽校を設立。小学校の放課後の居場所（現 放課後児童クラブ）として小学生を対象とした事業を開始し、その後、幼児期からの自然体験の重要性を感じ、2009年認可外保育施設めーぶるキッズを、2011年もあな保育園を開園した。「子どもを人間としてみる」を中心的概念とし、「Sharing Nature」・「Play a lot」・「Family Growing Together」という3つのコンセプトを柱にして、保育実践を行っている。保育施設として森のようちえんの実践を行っており、そのため室内環境も「木育」を大事にし、国産無垢材を使用した生活空間を実現している。園庭がない保育園であっても「森のようちえん」×「木育」の実践から都市部の保育園としての、保育事例の模範として注目されている。



取組の概要

🌿 取組の内容

通常、月曜日から金曜日までの午前中は、全ての子どもたちが自然緑道に出掛け、「森のようちえん」としての活動を行う。0～2歳児も1年を通して毎日外に出掛け、自然の移り変わりを五感で感じている。保育園ということもあり、0～2歳児の乳児保育の事例として関心を抱かれる方も多い。通常の保育園の2歳児の活動領域の広さと比較すると、圧倒的な違いがある。

幼児（3歳児以降）は、週2回は終日外で過ごしており、外で食事をするこの喜びと遊びの連続性を大事にしている。その他都会の利点から、月に最低2回は公共交通機関を利用して遠出し、身近な自然より少しダイナミックな自然



環境の中で遊ぶことがある。

🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

保育園機能としては、日中の外活動以外の重要性を感じており、「木育」として、国産材を使用した室内空間や机、椅子、おもちゃ(木の積み木やブロック)などの環境設定をしている。また、この木質化された園舎を地域の方々との交流の場として開放しており、いわゆる地域のハブとしての機能を持たせている。

本来保育園機能としての課題である保護者間との交流に関しても、普段の子どもたちの様子を知ってもらえるよう、自然緑道を利用したイベントを開催し、保護者間の共同性を高める活動を行っている。



🌿 実施体制について

若手の育成に関しては、保育従事時間の内外を利用して、多くのディスカッションに時間を費やしている。研修等に関しては、各保育者の研鑽項目に違いがあるため自ら希望を出してもらっている。

🌿 安全性への配慮

まずフィールドを熟知することの重要性を感じ、フィールドマップなどの作成などを通じて、危険箇所などの確認をしている。また、フィールドにおけるリスクに関してもミーティングの中などで、随時アップデートしている。

🌿 地域機関・団体との連携

自然緑道は都市公園として管理されているため、区の土木事務所及び市内の公園管理事務所と連携し、情報共有を行っている。また、公園内で活動するプレイパークとも密に連携しており、通常できない火や水を使った遊びを行っている。

取組による効果

🌿 子供・保護者への影響

子ども達が自然の中で遊ぶことで、子どもたちが何もない世界から想像力を働かせて、木の枝や葉っぱなどを使い素晴らしい作品を創り出す場面が多くある。また他者を気づかうことや思いやる心が育っていると感じる。さらにこのことが保育者からの指導のもとではなく、自ら創造し、自ら他者を思いやることはいわゆる主体性が育っているということがいえる。この子ども達の成長する姿をドキュメンテーションなどの可視化手法を使いその日の様子を伝えることで、親が本質的な子どもの訴えに気づくことがあり、子育て支援としての役割を果たしている。

🌿 地域社会への影響

NPO 法人として、環境保全に関する啓発活動に寄与しており、国産材推進、地元印刷会社との連携により環境に配慮した印刷物の作成、地産地消の取組を行っている。また、横浜市とも連携し、より良い地域環境づくりを目指している。

取組を通じて全体的な所感

自然環境のみならず街全体を資源として、地域における子育て支援や教育に関する協働作業を行うことが、都市部における保育園のミッションであり、園庭にこだわらず、園外に飛び出し、地域と連携しながら、他園にも影響を及ぼす園となることが重要であると考えます。

森のようちえんさんぽみちにおける自然保育の実践

NPO 法人ネイチャーマジック（兵庫県）

<https://morinoyouchien-sanpomichi.jimdofree.com>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

兵庫県西宮市は人口 48 万人の都市である。瀬戸内海と六甲山に囲まれ、大阪に近い都市でありながら、身近に豊かな自然が残されている。活動場所である甲山エリアは環境省により「生物多様性保全上重要な里地里山」に指定されている。また、山間部には古くからの農家集落があり、自然と共に暮らす文化風習が残っている地域でもある。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

始めは子どもたちの日常を自然の中に置く野外教育を目的にしていた。しかし活動を続けるにつれ、小さな園を中心に人と人、人と地域がつながりコミュニティが形成されるようになった。今ではこのコミュニティそのものが“園”として機能し教育力を持つようになっていく。子どもたちは自然環境だけでなく、自然とともに暮らす人と人のツナガリの中に身を置き、多くのことを学び育っている。そしてここで「自分の人生を自分の足で歩く」力を身につけることが今の理念となっている。

取組の概要

🌿 取組の内容

森のようちえんさんぽみちでは森を園舎とし、子どもたちが毎日森に通う日常通園型の自然保育を行っている。森遊びの日、朝 9 時に登園してきた子どもたちはおはようの会の後、森へおさんぽに出掛ける。11 時過ぎ、行き着いた先でお弁当を食べ、午後はそこで森遊びをして過ごす。14 時にまたねの会をして降園する。水曜日は野外調理の日、金曜日は畑と表現活動の日になっており、持ち寄りの野菜でお味噌汁をつくったり、畑仕事をしたりする。自然のリズムで暮らすことを園生活にしており、歳時記に合わせた行事などを行っている。



🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

活動場所は県立甲山森林公園とその周辺にある農園・キャンプ場などである。森林公園は自然がそのまま残されていながら、必要な整備がなされており、子どもたちが安心して活動できる場となっている。森遊びの日に自由を使いこなし、自立して創造的に遊ぶ子どもたちの姿は生き生きと輝いて見える。自然環境では日常的に生物の生死に直面し、いのちの存在を身近に感じることができる。また、自然という有機的な世界を実感することから、自分そのものを有機的な存在と認め、世界と自分がつなが

っているという意識へと変化していく。多様性の理解と自己肯定感の高まりをもって、自分の人生を自分の足で歩く子どもたちを育てていきたいと考えている。

実施体制について

幼児期の子どもの理解として幼稚園教諭免許・保育士資格を持つものがスタッフ全体の半数いる。自然体験・野外活動の知識・経験について、キャンプディレクター 1 級の指導者や日本アウトワードバウンド協会冒険教育指導者育成コース w-JALT 修了のスタッフがいる。内部では野外活動スキルや安全管理、自然の知識、子どもとの関わり方などを中心に、ミーティングや研修を行っている。

安全性への配慮

森のようちえん全国ネットワーク連盟による安全認証を受けている。また、メディックファーストエイドによる乳幼児の応急救護コースのインストラクターを務めるスタッフがおり、スタッフは全員このコースを終了している。活動場所である森林公園スタッフとも情報共有をし、子どもたちの安全確保に努めている。

地域機関・団体との連携

県立甲山森林公園との連携では、情報の共有や園内の整備などを行っていただいている。また、公園スタッフへの小児 MFA 救急法コースの提供を行い、当方のスタッフとのコミュニケーションを図り、緊急時の行動について確認している。また、甲山森林公園近隣にある甲山国有林について、兵庫森林管理署と遊々の森活動協定を結んでおり、ここでの森遊びも行っている。

取組による効果

子供・保護者への影響

子どもたちは自然の厳しさも優しさもそのままに受け入れる柔軟性を持ち、たくましく振る舞うようになっている。毎日を過ごす自然環境が、子どもたちの生活の一部になっていることを実感する。また、保護者の方々は園づくりを外側から支えるために様々な係グループをつくっており、横のつながりがとても深いと感じる。保育者だけでなく、みんなでみんなの子どもを育てているという感覚でいる。

地域社会への影響

森林公園では訪れる人たちにその存在を認められるようになり、「がんばってるね」など温かい声を掛けていただくようになった。また、農園ではおじいちゃん、おばあちゃんとの触れ合いが多く、こうしたつながりから味噌づくりを教えてもらったり、干し柿にする柿をいただいたり、餅つきの臼を借りたりしている。高齢者の方たちも「元気が出る」といって喜んでおり、子どもたちもつながりの中で生きていることを実感している。

取組を通じて全体的な所感

子どもたちが自然の中で自由に遊んでいる姿は本当に輝いて見える。しかし自由に振る舞うには責任が付きものである。子どもたちは一生懸命に自立し、他者と協調し、自然や集団を尊重する力を獲得している。その結果、こうして自由に遊んでいるからこそ、本当に輝いて見えるのだと思う。ここに自然という環境の持つ大きな教育力を感じている。

都心部における非日常型森のようちえん ～ノッツ森のようちえん “のあそびくらぶ”

NPO 法人国際自然大学校（東京都）

<http://www.nots.gr.jp>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

東京都狛江市を流れる多摩川は、一級河川でありながら、護岸化されていないところが多く、川辺の生き物、河川敷の野草が多くあり、野鳥も見られる自然豊かな場所である。一方で、台風の被害や公害による水質汚染の歴史も持つこの場所は、環境教育的視点で子どもたちに伝えられる教材が数多くある。「子どもたちにとって、遊びの原風景になってほしい」、「自分たちの故郷を守る気持ちを育ててほしい」という思いと共に、子どもたちの自由な発想をベースに展開される「遊び」や直接体験を重視する考え方にに基づき、活動をスタートさせた。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

「何か道具がなければ遊べない。外での遊び方が分からない。そもそも遊べる場所がない。ゆえに子どもたちの遊ぶ力が発揮されない」、そのようなことが言われて久しい昨今、「子どもたちの自由な発想で」、「豊かな想像力から遊びを作り出す創造力を引き出し」、「自分を取り巻く自然環境、友だち関係等から様々な気付きを得て」、「そこで一緒に過ごす友だちやスタッフとの関係性を築く」力を発揮できる場所を作り、提供することで、子どもたちの能力が開花することを目指し、継続的に行っている。

取組の概要

🌿 取組の内容

2歳～未就園児を対象とした「おさんぼくらぶ」、3歳～未就学児を対象とした「のあそびくらぶ」は、水曜日を中心に各活動2時間程度、子どもだけの参加で実施している。また、「のあそびくらぶ1Day」と称し、1日6時間の活動を行うプログラムは、3歳～小2を対象とし、よりダイナミックに、より深く、とことん遊べる活動を展開している。いずれの活動も、その都度申込みを受けているため、常に新しい関係づくりが展開される。一方でリピーターも存在するため、遊びや関係づくりの潤滑油となっている。



🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

基本的には、子どもたちの自由な発想で作られていく遊びを中心に活動を行っている。「多摩

川」という活動エリアの性質として、水辺での遊び（水遊び、釣りもどき）、土手滑り、石堀、石集め、石投げ、生き物採集（季節に応じた生き物）等が主たる遊びとして展開されるが、広場ではかけっこ、ひみつ基地作り、ごっこ遊び、木登り等も展開されている。子どもの数だけ、遊びが行われている状況である。「豊かな想像力から、遊びを作り出す創造力を引き出し」、「自分を取り巻く自然環境、友だち関係等から様々な気付きを見だし」、「そこで一緒に過ごす友だちやスタッフとの関係性を築く」ことを大切にしているため、特別な仕掛けはしていない。ただし、「遊びのきっかけ」として、例えば虫かご、虫網等を準備し、バケツやスコップなどの素材を提供するなど、「遊びの始め」だけ手伝い、促すことはある。その後、関わるスタッフ（職員やボランティア）は、子どもたちの発想の下で展開される遊びに寄り添い、共に活動し、共感しながら過ごしている。安全管理については、屋外である以上、自然体験活動の経験ある指導者（職員）がしっかり行うと同時に、子どもたちにもセーフティトークとしてリスクへの意識を持ってもらう声掛けを行っている。さらに、学生や社会人ボランティア（キャンプスタッフと呼称）にも協力してもらい、安心安全なプログラム運営に配慮している。

実施体制について

自然体験活動従事者である、自然学校の職員を責任者（ディレクター）とし、フォローの職員1名及びキャンプスタッフを、参加者数に応じて配置している。

自然学校職員は、下見、地形的なこと・危険な動植物・都市部ならではの危険等のリスクの洗い出し、運営マニュアルの作成、応急手当研修等をその都度行い、キャンプスタッフには、定期的な勉強会（自然に関する安全管理、子どもの発達段階について等）を行っている。

安全性への配慮

関わる職員・キャンプスタッフがリスクマネジメントを行い、事業運営に臨むのはもちろんのこと、参加する子どもたち自身にも、自分の身は自分で守ることを意識し、身に付けてもらうために、活動前に必ず「セーフティトーク」を行っている。

地域機関・団体との連携

広報の部分で、市政だよりのようなものに掲載してもらうことがあるが、それ以外では特に行っていない。

取組による効果

子供・保護者への影響

継続的に「森のようちえん」に参加している子どもたちは、危険回避能力が上がっているように感じる。また、身体的バランスが良いため、木登りや土手滑り、水辺での活動に安定感がある。さらに、初めての参加者を遊びに巻き込む力がある。未就園で参加していた子（2歳～3歳）は、年間で企画実施している当自然学校のキャンプ活動に参加するといった、体験活動のステップアップをしていく姿がある（年少児は自由遊びで遊ぶ力を発揮し、年長児以降は社会性を重視したグループ活動や野外スキルを学び得ていくプログラムで、協調性等を学んでいく）。

取組を通じて全体的な所感

子どもたちの生活の中に、「目いっぱい夢中になって遊べ、自分らしくいられる場所と環境と関係＝居場所」があることが重要だと考える。また様々な関わりを通して、思いやりや優しさを育み、友達と一緒に何かをする楽しさを知ってもらえれば、どんな困難にも負けない心と体を作っていけると感じている。森のようちえんがそんな役割を担う場であると信じている。

子ども家庭支援センターにおける 自然遊びプログラムの効果について

特定非営利活動法人マザーツリー自然学校（東京都）

<http://mothertree.michikusa.jp/>

取組の目的・背景・沿革等

🍃 地域の環境や状況

江東区は親水公園や都立の公園がいくつもあり、また、運河も多く、水辺と緑を身近に感じられる地域である。一方で臨海部ではオリンピック・パラリンピック開催に向けた開発が進み、未来型の都市整備が行われているところである。

🍃 取組の経緯・背景・理念等

大規模マンション高層マンションの開発により子育て世代の転入が多く、知らない土地での子育てが孤立しないよう、親子が少しでも多く外に出るきっかけをつくるため、また、こどもの健やかな育ちのために、区の子ども家庭支援センターと協働し、自然遊びプログラムを行っている。

取組の概要

🍃 取組の内容

子ども家庭支援センターとの協働で、近隣の公園を活用し、真夏を除いて定期的にプログラムを開催している。主な対象は0才児から3才児の親子で、公園をのんびり散歩しながら、親子がその日の自然と出会い、触れ合って、遊びにつながっていくよう、ナビゲートしている。

🍃 施設や場の特徴、プログラムの特徴

都市部ゆえ地面が舗装されている公園が多い中、あえて土が残っている公園を選んで活動している。土があればそこには草が生え、生き物が棲み、体験を通して自然の循環やいのちの循環を学ぶことができる。小さな子どもたちはでこぼこした土の上を、体のバランスをとりながら一生懸命歩いて、たくましくなっていく。

その背景には、こどもには自然と触れ合っほしいけれど、実際に何をどうしていいのか分からない、という親の声がある。親自身が自然体験、自然遊びを経験してきていないこともあり、そんな保護者と足下の草花や土、生き物、木の実や落ち葉などに目を向け、親子で一緒に遊ぶことで、次の公園遊びにつながるよう、また、プログラムをきっかけにこどもの自然遊びの幅がもっと広がるよう、心掛けている。





実施体制について

プログラム実施に当たり、参加者の状態を見極めるスキル、自然の中で起こる様々なことに臨機応変に対応できる柔軟さ、親子に寄り添う言葉掛けなどは実際に経験を積んでいく中で研鑽を図っている。

安全性への配慮

公園という公共の場を使用していることから、捨てられたタバコの吸い殻などに子どもたちが触れることのないよう、プログラム実施 30 分前に活動予定のフィールドのゴミ拾いを必ず行っている。

地域機関・団体との連携

江東区子ども家庭支援センター

取組による効果

子供・保護者への影響

プログラムをきっかけに、保護者は身近なところにも自然があふれていることに気付くようになった。そして、ブランコやすべり台でなくても、子どもたちはドングリや小枝などで楽しく遊べると、公園に対する意識が変わるようである。子どもたちも体験を重ねるにつれ、自然との付き合い方も大胆かつ上手に、また、遊び方も創意工夫にあふれ、のびのびと成長している。

地域社会への影響

こどもの外遊びを促進し、健全な育ちにつなげることで、地域での子育ての支援になっている。また地域の自然を愛する気持ちを育むことができている。

取組を通じて全体的な所感

どんなに天気がいい日でも子ども家庭支援センターの室内で遊んでいる親子が気になっていた。継続的な活動で0才の頃から子どもを自然の中に連れ出すことができ、地域の自然に親しんでもらいながら、こどもの成長を見守ることができるのは、何よりうれしいことである。

大人も子どもも共に育つ、 地域がつながる森のようちえん

森のようちえんウィズ・ナチュラ（合同会社 SOULS）（奈良県）

<http://www.withnatura.com>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

活動拠点のある天理市高原地域は自然豊かでありながらも、都市部からのアクセスが良い。少子高齢化により過疎化が進む中、伝統行事や農地保全等のイベントに子どもたちや外部からの参加者を積極的に受け入れている。

地域の町おこしイベントなども協働で行っている。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

森のようちえんウィズ・ナチュラは、年間を通して四季折々の豊かな自然の中で、子どもたちの主体性を大切に自然保育活動をしている。地域の皆さんとも交流しながら、持続可能なコミュニティ作りを目指して、子どもひとりひとりの持つ無限の可能性と成長のプロセスを信じて見守り、生きとし生けるもの全てへの感謝の気持ちを育みながら、人としての在り方や生き方を学ぶことを大事にしている。

取組の概要

🌿 取組の内容

平日週5日の3歳児から5歳児の森のようちえんを中心に、週1日の未就園児の親子クラスや赤ちゃんクラス、自然保育を体験できる家族向けのイベント、多世代を結び持続可能な地域づくりを目的としたマルシェも開催。

🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

天理市高原地域3町全ての自然環境や人、伝統行事などを保育資源とし、その地域の課題を子どもも大人も主体的に考え、取り組める機会を作っている。

🌿 実施体制について

ようちえんは園児15名、保育スタッフは12名の中から交代で毎日3人ずつ保育に入る。保育の質は保育者の質と考え、子ども一人一人の成長のプロセスや課題への取組に寄り添っていくためにも、保育者自身が自分と丁寧に対話し、心を整えて保育に入ることを大切にしている。





安全性への配慮

各フィールドや活動場所ごとに、季節や活動内容に沿ったリスク管理を行っている。森のようちえん団体安全認証を受け、スタッフだけでなく、保護者も全員が毎年救急救命講習を受講し、定期的に研修も実施している。

地域機関・団体との連携

天理市と「自然環境を活かした教育・子育てに関する連携協定」を締結し、子どもが真ん中の高原地域ならではの新たな教育モデルを目指している。

取組による効果

子供・保護者への影響

子どもたちは地域の中での多世代交流を通して、地域や人への愛着心が育まれている。日々の保育で自然と関わる中、身近な地域課題や環境問題を自分ごととして考え行動するようになった。地域の人が活動に賛同し、子どもの育ちを共に見守ってもらえる環境が、保護者にとって心底安心して子どもを預けられる場となっている。

地域社会への影響

これまで地元住人だけで町おこしや里山整備等をしていたのが、若い世代が関わることで、これまで生まれなかったアイデアや継承につながる動きが見られる。耕作放棄地活用や放置林の再生、廃校を利用した親子向けのマルシェなど、関係人口が急増し、森のようちえん関係者や移住者と地域住人が交流する機会が増えた。

取組を通じて全体的な所感

幼児期の子どもにとって多世代が集い、多様な価値観に触れながら地域で成長を見守ってもらえる環境はこれ以上ない豊かな体験の場だと感じている。保育者や保護者にとってもたくさんの温かい目を子どもたちに向けてもらえる安心感は大きい。非認知能力や自己肯定感、本物の生きる力が育まれているリアルな姿を地域の人にも感じてもらい、自然保育の本質や重要性を共有できることがうれしい。これからの時代に求められる教育・保育の在り方だと確信している。

『おさんぽ子育て支援』のススメ

一般社団法人 new education LittleTree (東京都)

<https://www.new-edulittletree.com>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況、取組の経緯・背景・理念等

子育て中の親の中には、自身の幼少期に自然の中で十分に遊んだ経験がない方が多くなってきている。社会全体の生活様式が大きく変化したことが要因であり、都心部だけでなく自然豊かな地域でも、外遊びをあまりしていないという状況である。

今の子どもたちには大人が意図的に自然に触れさせようと思わなければ、自然を体験する機会が生まれにくい。子育て支援の活動の一環として、親子のおさんぽイベントを行い、自然が身近になってほしいと考えている。イベントを通して自然体験の大切さや楽しさを伝え、親子で自然を感じながら散歩や外遊びをする機会が増えることを願っている。

取組の概要

🌿 取組の内容、施設や場の特徴、プログラムの特徴

単発的な発信としての講座やお散歩会を提供しているが、これをきっかけにお散歩を取り入れた子育て支援が広がることを期待している。「どうやって外遊びをさせたら良いかわからない」という親御さんの声から、外遊びの講座などを子育て支援センターや子育てサークルなどが主催し、講座やお散歩会を行うことが多い。

自然に触れることの価値や機会を提供し、親も子どもと一緒に自然に触れ、体験することを心掛けて行っている。

参加親子のほとんどは、0歳～3歳までの子どもと親ということもあり、過度に危険の心配をする親が多くいる。ある程度緩やかに子どもの遊びを見守っていても大丈夫ということを知ってもらうため、子どもの育ちの特性（0歳は触覚遊びを、1歳児は階段の上り下りなど歩くことを楽しむなど）を伝え、子どもの体験を見守るような関わりを促している。

以下3か所の活動を例に挙げてみると、環境やニーズに違いはあれ、保護者にとって心地の良い体験になることを心掛けることが大切だと感じている。

川崎市プレイセンターかんがる～では、親がまずは自然に気付くようなアクティビティを行った。その後の質疑応答では普段外遊びの時に迷うことなどの話が出た。自然に触れる体験もでき、もっと外遊びをしてみようという気持ちになったと感想があった。

岩手県田野畑村のお母さんグループでは、ゆったりとお散



歩を楽しむことを目的とした。自然を知っているスタッフと安心できる状況の中、みんなでお散歩をすることで、子どもと二人きりだと発見できない自然を体験できたとのことだった。

千葉県子育て支援ステーションニッセでは、4か月の子どもも参加しており、文字通り初めての外遊び体験になった。その際、母子ともにリラックスして参加できるように配慮した。このように、お散歩や外遊びの体験を親子ですること、自然の中で過ごすことの心地よさが感じられるようにしている。



実施体制について

お散歩会や外遊び（おさんぽ子育て支援）実施の際、近隣の公園や広場などの小さな自然があれば行える。

特別な知識はいらず、参加者と一緒に自然を感じながら楽しむことができれば、簡単に実施できると思っている。

安全性への配慮

危険なことをあまり強調せず、少しのヒヤヒヤやドキドキする体験やチャレンジから、子ども自身が安全について学び取っているという話をしている。その上で、危険箇所の共有をしてからお散歩に出掛けている。

地域機関・団体との連携

子育て支援の活動をしている団体、保育園や幼稚園（親子イベントなど）。

取組による効果

子供・保護者への影響

自然の中に出ることで、親子がリラックスして過ごすことができる。建物の中で遊ぶよりも、子ども同士でのトラブルも減り、親も他の人に迷惑を掛けてしまうのではないかと、というストレスが軽減される。

また、集団に入ることが苦手な子どもを抱える親にとって、大勢が集まる室内に連れて行くことは難しく、自然の中で集まってお散歩するということで孤立せずに緩やかに参加ができ、心の拠り所を作りやすいと考えている。自然の中で過ごすことで他の親子とのつながりが持ちやすくなっている。

地域社会への影響

都心部でも地方でも、子育て中の親は（特に乳児期）孤立しやすい社会だと思われる。自然を楽しむというきっかけで集まることで、孤立してしまっている親子を救う手立てとなると感じている。

取組を通じて全体的な所感

『良いとは分かっているがなかなか足が向かないお外遊び、今日子供ののびのびとした表情を見てやっぱり良いと感じました』アンケートでいただいた感想である。こうした親子に向け、お散歩を通じて子育て支援を行うことの意義を感じている。『おさんぽ子育て支援』は手軽にできるので、広がってほしいです！

静岡市街地から近距離の里山を生かした 野外保育ゆたかの保育活動

野外保育ゆたか（静岡県）

<http://yhyutaka.com/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

南に駿河湾、北に南アルプス、その中間に我々の活動場所である日本平丘陵があり、静岡市は市街地のすぐ近くに自然豊かな環境や里山がある。しかし、これらの環境資源が子育てや保育、教育に活用されているとは言い難い。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

幼少期に身近な自然環境の中で毎日を過ごすことで、未来の予測がつかない情報社会の中でも主体的に社会の諸問題に関わっていけるしなやかな心身が生まれ、社会的には静岡の豊かな自然環境を子育てに生かすモデルになるのではないかと考え、自然の中での教育を行う森のようちえんの開園に至った。

取組の概要

🌿 取組の内容

保育時間は月曜から金曜の9:00から14:30。2019年現在3歳児、4歳児、5歳児の3学年24人が所属。地元農家から借りているメインフィールド「ゆたかの畑」とその周辺の日本平ハイキングコースなどが主な活動場所。

🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

朝の会で子どもたちは一人一人「今日やりたいこと」「今日行きたい場所」などを発表する。午前中散歩に出て午後は「ゆたかの畑」で過ごすことも、昼食を持って1日山の中で過ごすこともある。週1回は年長児が昼食を準備する「食の日」。マッチで火をおこし、かまどで米を炊き、味噌汁や煮物を作る。食事の支度は細かな指示をせず、自分たちで考えてやってみることを大事にしている。焚き付けに使う杉の葉も、散歩に行ったときに拾ってきて保管。

「あるものでいかに暮らしを作るか」の体験の機会にもなっている。食の日の午前中は年少と年中は散歩に出掛け、帰ってきたら昼食ができています。年少年中は自分が年長になって食事の支度をするのを楽しみにしている。

偶然の出会いや天候の変化などにより、朝話していた予定から変更になることも多くあるが、そういった自然の中ならではの出会いや子どもたちの気持ちの動きを大切に考えている。



「ゆたかの畑」近くの農地の持ち主や活動場所を整備している里山保全団体には、いつでも自由に遊びに来ていいと場所提供や作物をいただくことがあったり、散歩コースにある地元団体が整備するお花畑も遊び場にさせてもらっていたりと、周辺地域の住民も活動を理解、協力していただいております。子どもたちと活動されている年配の方々の触れ合いの場面も見られる。



実施体制について

保育者は常時4名で、保育士や幼稚園教諭などの有資格者が半数を占める。また、半数は野外での環境教育活動の経験者である。幼児期は知識の取得より、自然の中に身を置き、自分の体で色々なことを感じ、不思議に思うといった心が動く体験を重視し、失敗しながら学ぶことを優先するべきと考えている。保育者はそれぞれの季節での各フィールドの情報を収集し、計画や安全管理などに役立てている。

安全性への配慮

独自の安全マニュアル作成や安全に関する講習会への参加、ヒヤリハット報告の即時の共有などを心掛けている。危機回避訓練を子どもと共に月1回程度実施しており、自ら身を守る方法も伝えるようにしている。2019年森のようちえん団体安全認証取得。

地域機関・団体との連携

2016年に静岡市主催の移住ツアーを受託し、ツアー参加者のうち2組が静岡に移住し入園した経緯がある。その後も、静岡市の移住ツアーのプログラム実施や、東京にある「静岡市移住支援センター」経由で移住検討者の見学受入れ等を行っている。

取組による効果

子供・保護者への影響

保護者から「自ら考えて何とかしようとする力」や「自然物や気候などに対する敏感さ」等が育まれていると感じるという声がある。また、卒園児の中には「小学校の遠足はなぜ先生が行き先を決めるのか」と、世の中の当たり前的事柄に対し疑問を持つ視点も見られる。

地域社会への影響

近隣の地域住民から、活動への賛同の声が聞かれたり、協力を申し出ただけの方がいらっしたりと、子どもが自然の中で育つことに意義を見いだしていただいていることが分かる。また、静岡市の他の子育て支援団体からも関心が高く、子育てをする場としての自然環境の役割に気付いてもらうきっかけになっている。

取組を通じて全体的な所感

子どもたちが本来持っている育とうとする力が一番発揮しやすい場が自然の中だと感じている。また生活に根ざした本来の日本の子育てを再現しやすい場でもあると思っている。幼少期に自然の中で育つことが当たり前の世の中になれば、自ら自分の道を切り拓いていける人が増えるという希望を持っている。

森と子どもと馬をつなぐもの

NPO 法人山の遊び舎はらぺこ（長野県）

<https://harapeko.ww8.jp/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

いわゆる里山なる環境に位置するはらぺこでは、住宅地でありながらも自然豊かな環境がそこかしこにあり、子どもたちは毎日その環境を生かして遊び込んでいる。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

「はらぺこ」は2005年、自然の中でもっとのびのびと子どもを育みたいと願った保護者と保育士が出会い始まった。自然との関わりの中で地に足の着いた暮らしを続けていく中で、わずかながら馬との関わりもでき、乗馬や馬搬、そして馬耕へと広がりを見せている。

取組の概要

🌿 取組の内容

子どもたちの遊びやすい環境にするため、園舎周辺の森林を間伐し、その材を製材して板などに加工した後、子どもたちのクラフトや園舎の整備を行う材としている。今回紹介する取組では木を伐採した場所から材をトラックに積むことができる駐車場まで丸太の運搬を馬搬でお願いをし、その様子を園児はもちろん地域の小学生（1年生）にも来園を呼びかけ、一緒に体験できるよう企画した。

🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

子どもたちは迫力ある木の伐採場面を、表情のある木々が倒れていくのを複雑な気持ちで見ている。暗い斜面に光が差し込む景色と横たわっている丸太を見て、「あの木、かわいそうだね」というつぶやきをのみ込みながら、心を揺らしていた。そんな気持ちを大事にしながら一本一本の木を大切にに使わせてもらおうと大人も心を新たにした。馬との関わりも単に機械の代わりとしてではなく同じ心を持ったものとして身近に感じてもらえるよう、なるべく子どもたちの意識に溶け込めるよう牧場の方とも話をし、毎回臨んでいる。今回は馬搬を始める前に、馬について話をしていただき、人と馬は共に暮らしていた長い歴史があるのだということ伝えていただいた。小学生の中にはこの日初めて馬を見た、という子どもも何人かいた。その後、実際に馬が運ぶ予定の丸太を子どもたちが引っ張ってみてどのくらい



の力が必要なのか体験した。自分たちの力ではなかなか進まなかった丸太を馬に装着すると、初めのうちは馬も調子が取れずうまく進まなかったが、誰ともなく「がんばれ！」と声が掛かり、みんなで「がんばれがんばれ」と応援すると、ドドツと丸太が動き出す場面にみんなが歓声を上げ馬の後を追いかけた。森という場で何かにつながった瞬間だと感じた。

実施体制について

今回、関わっていただいた全ての人が、次の世代、次の社会に対する意識が高い人たちだと感じた。次の世代に何のバトンを渡すのか、考え続けて更に実践していくことが大切だと感じた。

安全性への配慮

牧場の方が現場に下見に来て打合せをし、当日も子どもたちに馬との関わりで気を付けなければならないことをしっかりと伝えていただいた。

地域機関・団体との連携

小学1年生（2クラス）のほか、ご近所の皆さんにも声を掛け見に来ていただいた。「昔はこの辺でもよく馬が働いていたんだ」といったような話が飛び交っていた。

取組による効果

子供・保護者への影響

この後、子どもたちと一緒に馬も食事をしたり、午後は子どもたちと一緒に散歩に行ったりし、一日たっぷり子どもたちと馬と一緒に過ごしました。大量の糞に驚いたり、ブラッシングをさせていただいたり、様々に関わる中で子どもたちの気持ちの中でもどんどん馬との距離が縮まりました。馬にも気持ちがあり、動きたい時もあればそうでない時もあり、それは自分たちと同じなのだというような気付きは、他では得られない体験だと考えられた。

地域社会への影響

毎年のようにさせていただいている企画なので、地域の方々も環境整備やそれに伴う馬搬などに理解を示していただいている。

取組を通じて全体的な所感

数か月後、運び出した木材の加工を製材所へ見学に行くことになった。ここでも、木を愛する人たちが一生懸命はらぺこの丸太を板などにしてくれて、みんなで「ありがとう」を伝えることができた。森からたくさんの工程を共に体験をすることができ、関わってくれた人の顔が思い浮かぶ関係性を築くというのは、木材でも食材でも暮らしを中心とした幼児教育においてとても大切なことだと改めて感じた。

旅する森のようちえん

～エコツーリズム手法を活用した、非日常型活動

特定非営利活動法人いぶり自然学校（北海道）

<http://iburi-nature.com/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

新千歳空港から30分圏内でありながら、ヒグマやクマゲラが生息する自然環境を有している。しかし、幼児やその保護者はその環境にほぼ気付いておらず、学校・幼稚園・保育園関係者もその有用性を生かしていない。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

「子どもと自然と、まわりの大人」というコンセプトを掲げ、その三者全てに幸せが訪れる活動の一つとして、森のようちえんを手法とした活動を展開している。その中で、他地域に行くことで、自分たちの地域の環境により目を向けることができるのではないかと考え、幼児と保護者に優しいツアーを企画した。

取組の概要

🌿 取組の内容

本州で森のようちえんを展開している団体に声掛けをし、親子で新千歳空港にやってきてもらう。空港から15～30分圏内の移動範囲で宿泊場所と活動場所を用意し、当団体のスタッフ及び当団体と関係の深い地域支援者と協力して、幼児と保護者のための自然体験活動の提供を行う。活動だけではなく、地域物産や農作物、地域にある文化や歴史も織り込み、幼児の遊びの中にふんだんに旅情を楽しめるような活動に仕立て上げる。



その活動をパッケージ化し、本州の他団体にも利用いただけるような横展開を進めたり、このような活動をやってみたいという地域を開拓したりして、より多くの幼児と保護者の知的欲求を満たす場と機会を創出する。

🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

移動時間が短く、子どもたちが屋内でも自由に動き回れて、かつ、家族のプライバシーを確保できる場として、廃校舎を利活用している。そして、子どもはもちろん、一緒にきた保護者も大人として楽しめたり、休んだりできるプログラムを用意することを重要視している。

実施体制について

最初は行政にも関わってもらい、受入れ協議会を立ち上げ、受入れ支援とその周知を行った。モデルができ始めた後は、より動きをスムーズにするために、いぶり自然学校の一事業として運営することとし、最後はより受入れ地域に近いNPO 団体へ事業譲渡を行うことで、事業の継続性を確保した。

安全性への配慮

自然学校として培った安全管理体制とそのノウハウをそのまま利用し、活動を展開した。積極的に地域人材や学生ボランティアにも関わってもらい、そのノウハウが継承されることに留意した。結果、他地域でも活動を安全に展開できる人材を育成することとなった。

地域機関・団体との連携

運営協議会を通して、近隣自治体と協定を締結し、お金ではない支援、例えば施設や備品の借用などに減免措置を講じていただくことを通して、参加者の負担を軽減させることに成功した。また、当団体にノウハウを集中させるのではなく、より受入れ地域に近いNPO 団体へ権限移譲をすることで、より濃密で地域性の高い活動をスピーディに展開できるようになった。

取組による効果

子供・保護者への影響

日常的な活動場面では、活動に制約が多くなってしまいう子どもにとって、「ずっと遊んでいてもいい」という非日常は、まるで鎧を下ろすような感覚があったのではないかと考えている。また、保護者にとっても、子育て中は旅行にも行けない、と諦めていたところを実現させるような機会となり、子どもの全開遊びと保護者のリフレッシュや知的満足を促進する、という非日常的活動ならではの効果を引き出すことができた。

地域社会への影響

他地域の子どもたちと保護者が来ることで、普段の自分たちの生活環境が大きなポテンシャルを持っていることを再確認できたことが大きい。そして、この手法がモデル化され、他地域でも展開されるようになった現象を見て、「この活動は間違っていなかったんだ」と確信することができた。

取組を通じて全体的な所感

幼児の活動を、単に幼児の成長や保育の一手法として見るのはもったいない、幼児や保護者による自然体験活動にもっと価値を見だし、他の課題を解決させられないかと常々考えていた。その一つとして、「森のようちえん手法を活用した森林整備」という活動を10年近くやってきたのだが、その可能性を更に広げられないか、と思索する中で、「人が来れば来るほどその環境が良くなっていく」というエコツーリズムの概念を森のようちえんに当てはめられないか、という掛け算が生み出した事業である。ともすれば地域のことは地域で解決するとか、地域の子どもは地域で育てる、というアプローチばかりが語られやすく、それは大切であると思いつつも、その一方で非日常の持つ力を生かした、質の高い「非日常活動」を作り出せば、点や線ではなく、面として地域ガバナンスが進められるのではないかと感じている。

認定こども園 Fuji こどもの家バンビーノの森における 森のようちえん型サマースクール

認定こども園 Fuji こどもの家バンビーノの森（山梨県）

<http://www.bambino-mori.co.jp>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

富士北麓の園庭の森と、近くの私有林数か所を無償でお借りして主な活動を行い、また、近くの河口湖畔での活動も取り入れている。

自然に囲まれた生活環境ではあるが、家庭で自然に触れ合う機会は少ない。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

2007年より地域の子どもの自然体験の場を作ることと卒園児が夏休みに帰ってくる場と考えスタートしたが、数年後には東京を中心とした都市部の子どもが夏休みの体験として参加するようになってきた。地元の子とも都市部の子どもが自然の中での遊びを通し仲良くなり、次年度の再会を約束するなど、自然の中での遊びを継続するきっかけとなっている。

子ども自身が「また行きたい」という場所が、自然を楽しむ場所となることを願っている。

取組の概要

🌿 取組の内容

夏休み（7月下旬からの3週間）に年少～小学2年生を対象に、1週間単位で申込可能なサマースクールを、3クール行っている。毎日9時集合、15時解散で宿泊を伴わない。原則として、天候にかかわらず、森林内での自由遊びを中心に1日を過ごす。

🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

森の中での自由遊び、自然物を使ったクラフト、河口湖での水遊び、外国人講師による英語での遊びなどを行っている。毎日森で活動している、バンビーノの森の子どもも同じフィールドで活動しているため、自然の中での遊びが不慣れな子どもでも遊びを発展させやすい。

観光地でもあるので、保護者は子どもが参加している間に大人だけで自然体験や観光を楽しみ、前後の週末に親子で体験を楽しんで帰る様子が見られる。

「自然環境を大切に」ということは机上の学びで理解することはできるが、「自然環境を大切にしたい」という思いは、幼少期に自然の中が“楽しい”“面白い”“不思議”という原体験をしていることが不可欠だと考えている。



実施体制について

実施者は保育士・幼稚園教諭など、子どもの発達段階や特性を理解している者、自然体験の知識や技術を持っている者などの連携と相互の学びが必要である。安全管理の視点においても、子どもの発達における視点と、自然体験の視点が必要で、情報共有と学びの場を継続的に設けている。

安全性への配慮

実施者であるバンピーノの森は、NPO 法人森のようちえん全国ネットワーク連盟の団体安全認証を受けている。

服装や持ち物など子どもが快適に過ごすための準備を事前にお知らせし、危険な動植物とその対応の仕方などは、実物や写真等を使い参加者と共有している。

気象状況の変化にも注意を払い、事務所（本部）と現場の情報伝達が常にできる体制を作り、シーズン前には、暑さや急な雷雨等の対応の仕方をスタッフで再確認している。

また、ヒヤリハット小事故報告をこまめに共有検証し、安全意識と対策の向上に努めている。

地域機関・団体との連携

河口湖畔での活動においては、地域の自然学校（カントリーレイクシステムズ）にフィールドと子ども用ライフジャケットをお借りし、指導者のアドバイスを受け活動している。また、英会話教室の外国人講師と一緒に遊ぶ機会も設け、活動に膨らみを持たせている。

取組による効果

子供・保護者への影響

継続参加している子どもの母親から、次のような話を聞きました。「家族で出掛けた際に、子どもが落ちていたゴミを拾ってきた。“そんな汚いものを拾ってきて”と言いそうになった時、子どもが“木がかわいそうだね”と言った。こんな気持ちも育っているのですね。親の私が恥ずかしくなりました。」

2～3クール連続で参加する方、小学2年生まで毎年参加する方、次年度には友達を誘って参加する方など、子どもの楽しかった記憶と共に、保護者が良さを実感していただいているからだと感じている。

地域社会への影響

この活動の母体である、認定こども園へは、“森のようちえん”という活動に共感し、広域から入園希望がある。保育者においても、広域から採用応募がある。

地域の公立保育園の子どもたちを森へ招くといった交流活動も始めている。

これらの取組を通じて、少子高齢化対策にも貢献していると思われる。

取組を通じて全体的な所感

サマースクールの活動は、普段自然と触れ合う機会が少ない子どもたちが自然と触れ合う機会となるだけでなく、そこに暮らす同世代の子どもと遊びを共有することで、楽しさも倍増し、より自然を身近に感じ、その地域全体を好きになり、大切にしたい心と育んでいると感じている。また、宿泊を伴わないことが年齢の低い子供でも参加しやすく、1週間という連続性が“自然と触れ合う”の1歩先の経験へつながっていると思われる。

全国各地に活動が広がる 森のようちえん

飯綱高原ネイチャーセンター 内田幸一

森のようちえんは、様々な地域の自然の中で行われる幼い子どもを対象にした幼児教育活動である。全国各地の森や川、海辺、里山、自然公園等で活動している。四季折々の自然の中、地域環境を生かした活動が行われている。畑の活動や田植え、山菜採りや野草でのお料理など、森の中の散歩や田園や野原での散歩、森や川での遊び昆虫や魚などつかまえることも、果物や野菜の収穫、稲刈り、木の実や小枝、蔦やツル紅葉した落ち葉など自然の物を使った工作など。ジャム作り、干し柿作り、味噌や醤油なども作っている所がある。冬は冬の森の散歩、焚き火で焼き芋やお餅なども焼くなどする。また、季節ごとの伝統行事や収穫祭、餅つきなど保護者との活動も様々なそれぞれの園で行われている。



森のようちえんは、自然と人の生活がつながっていることを日々の体験を通じて子どもたちが捉えられるようにしている。森などの自然環境の中でゆったりした時間を過ごし、思いつくままに遊びを行う自由な時間もたっぷり用意されている。自分の興味関心に従いながら遊びを見つけ、それを行うことが大切にされる。そして、多様で変化に富む自然の中で子ども自身が自ら気づき、不思議に思ったり様々な発見をしたりする。五感を駆使し、感じた事を言葉にし、直接触れる中で自分を取り巻く世界を理解していく。自然の中での遊びや生活は仲間と協力し合うことや話し合うことがたくさんある。年齢の違いや色々な考えを持つ友達とのコミュニケーションを常に行っている。

森のようちえんの中で育つ子どもたちは、自分で考え色々なアイデアを形にして遊ぶことが得意である。友達とよく遊び、小さな子に親切で優しく関わる。山道や坂道を歩くこと森の中で遊ぶことで、体力や身のこなしの良さを身に付けるようになる。けがや病気になりづらく、気持ちも前向きある。刃物などや生活に必要な道具を上手に使い器用さと根気がある。仲間と相談したり自分たちの決まりを話し合いで決めたりすることもできる。

森のようちえんは子どもが子どもらしく、自分らしくいながら、子どもも大人も皆が育ち合う場所である。



幼児の自然体験における 安全性の確保

一般社団法人 森のようちえん はっぴー 沼倉幸子

子どもを取り巻く環境は時代と共に変化し、現在は意識をしなければ自然の中で遊ぶ機会がとてま少なくなっている。都市化が進んだことで自由に遊べる広場や自然が減少し、自然は私たちの生活から遠い存在になりつつある。こんなにも自然からかけ離れて生きる時代は、これまでになかったのではないだろうか。

自然は小さな子どもにとって好奇心をかきたてる不思議な世界である。心が安らぎ、豊かな感情が育まれる。好奇心や思考力、表現力の基礎が培われ、幼児期の発達にとてま重要な役割を果たす。しかし、自然には危険な要素もある。幼児期の自然体験が安全に行われるには、子どもの発達や心理を理解したうえで、リスクマネジメントをしっかりと行うことが重要である。

幼児の自然体験の場では、いくつかの特徴的な姿がある。よくある姿として、棒や木の枝を拾って持ち歩く。高いところに登ったり、隙間に隠れたりするのも好きだ。水があれば、触れたり入ったりするし、石を拾って投げたり、小さなものだと鼻の中に入れてしまうことだってある。桑の実や木苺などの木の実を、自分の手で取って食べるのも大好きである。好奇心旺盛な子どもにとっては、自然の中にあるものは何でも魅力的だ。

その魅力を最大限に生かして、子どもが伸び伸びと自分らしく成長できるようにするには、自然体験活動が安全に行われなければならない。そこに寄り添う大人が、ある程度の自然知識を体得していると良いのだが、自然と離れた生活をしている大人も多く、指導者自身の体験不足も感じている。

例えば、木登りが得意な子どもがいたとする。スルスルと登る子どもを見たときに、木登りの体験がある大人は、どの枝にどう足を掛け、下りる時には、どこを注意して見ていたらよいかを実感として分かる。危険と感じたときに掛ける言葉も、落ち着いて要点だけ伝えることができる。しかし木登りの体験がない大人は、怖くて見てられない。一刻も早く無事に下りてくることだけを願い、具体的にどう危険を回避するかが考えられない。そのような方には、自分が怖いと思ったときに、子どもに木から下りてきてもらうよう声をかけてくださいと伝えている。あの人が見守っているから、自分も同じ見守りができるかということ、自然の中では難しいことがある。大人が自然体験活動の経験があるかどうか安全確保に関わってくると思われる。

では、その経験が少なければ指導者として寄り添うことができないのかということ、そういうことではない。経験が豊かな人も少ない人も、共通しているのは自然体験活動のリスクマネジメントをしっかりと計画し、実行に移せるようにすることである。自然体験活動のリスクマネジメントは、NPO 法人自然体験活動推進協議会などで講習を行っているので、専門家から学ぶことをお勧めしたい。また万が一事故が起きてしまった場合、命を守るための救急法訓練を怠らないようにすることも大切である。

リスクマネジメントをしっかりとすることで、自然を甘く見ることなく、怖がることなく、その世界を存分に楽しんでもらいたいと思う。

「自然遊びで育む生きる力」

枚田みのり保育園（兵庫県）

<https://k-fukushikai.com/minori/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

当園は兵庫県の山間部に位置し、雲海に浮かぶ姿から『天空の城』で広く知られた竹田城跡の麓にある。昭和26年に開設し、平成28年4月から幼保連携型認定こども園に移行した機会に現在の施設を建設した。その時こだわったのは、自園の保育理念に施設環境を適合させることであった。

乳幼児期の教育・保育の基本的な考え方は保育所保育指針に示されているところだが、具体的に保育に取り組む手法や環境設定は、それぞれの地域性や園の独自性、創意工夫が尊重されている。私たちの地域は周りが野山に囲まれ自然豊かな環境に恵まれているが、自然に触れるには園外に出る必要があり、常に自然遊びが出来るわけではなく、いつそのこと園庭に自然を持ち込もうと考えたのがビオトープであった。

計画に当たり粘土で園庭のジオラマを作り、小さな山に小川や池を配置し、保育園が子どもたちの心の故郷になりたいという思いもあり、植え込む草木は地元で生息するものを使うなどこだわった。さらに、季節や日々変化する自然環境との遊びを通して、一人ひとりが異なる様々な発見や関心興味を持ち、新しい遊びに発展し、時にはクラスの活動につながることも期待した。保育理念の「一人ひとりを大切に自らの経験を通して学ぶ、子どもの健やかな育ちの環境づくり」を目指した。

取組の概要

🌿 実施体制について

最初は保育士の戸惑いや、安全確保ができるのかという保護者の声もあったが、何よりも子どもたちが楽しく遊ぶ姿や、自らが工夫して創造し遊ぶ活動に心配は払拭された。その具体的活動内容の事例のいくつかを紹介する。

①モリアオガエル

園庭の池には天然記念物のモリアオガエルが産卵にやって来るようになった。「これは大事な卵だから」と保育士が声を掛けると、触らずにずっと見守ってくれる。木に産みつけた卵が池に落ちてオタマジャクシになりカエルになる様子や、毎年産卵に来ることを知り、命が受け継がれていることから「命の大切さ」を学ぶ。折り紙でモリアオガエルを制作し、目を描こうとした時、「目の色は何色かな」声掛けをする



と、早速撮影した写真を見て図鑑を調べ、モリアオガエルは目の色が赤色と知り、他のカエルの目は黄色が多いことに気付いた。カエルの興味はクラスに広がり、水槽で飼育して動きを観察し、更に池に来るカエルの種類や名前を覚え、違いに気付き関心が深まった。

②植物遊びや、タケノコ遊び

園庭には地域の草花や樹木が100種類以上あり、沢山の小さな花を咲かせ実を付ける。それを見つけて遊びを工夫するのが楽しいようだ。エゴの実やネムの木の葉っぱを使った石鹸あそびもその一つだ。容器で葉っぱと水をかき混ぜ石鹸を作り、泡立ちは時間が経つほど良くなる大発見をした。タケノコは近くの竹やぶから採ってくる。皮をはがし、何層も重なっていることや、包丁で半分に割ると中に節があることに気付いて、皮を帽子にして遊んだり、草花を詰め込んだお弁当作り、竹コップ、竹ぼっくり、船作り、版画制作などをしたりと、子どもたちのアイデアから沢山の遊びが広がった。



取組による効果

🌿 子供・保護者への影響

当園の運動会は練習をしない、保護者・地域の方々の参加による「ふれあい運動会」である。保育園に隣接した地域の運動場を借りるが、園庭を利用する種目では自然遊びを取り入れ「親子のふれあい」をねらいに保育士が種目を工夫している。園庭に生息している草花の名前や匂い当て遊びなどを親子で楽しむ。「えーっ、そんなん知ってるんや」と教えられて驚く親の光景が多く見られ、子どもの成長や興味関心を知り、日頃から取り組んでいる自然遊びの意義を親子のふれあいの中から感じてくれる。



取組を通じて全体的な所感

ここに紹介したのは事例の一部である。自然環境は日々無限の変化をもたらし、子どもの遊びも無限に広がる。その遊びの過程において、ひらめきや創造力、我慢や協調性など非認知能力が育まれ、それは今の子どもが大人になる頃のAIと共存する社会に生きる力となる「人間らしさ」の育みだと思っている。

様々な行事に自然遊びを取り入れることで、保護者や地域の方々の関心や理解も広がってきた。これからも自然遊びを通して、子ども・保護者・保育者がふれあい、育ち合い、更に故郷を大切に作る地域づくりの一端を担うことができると考えている。

子どもの気付きや探究の深まり ～自然との共生から～

富田林市立錦郡幼稚園（大阪府）

<https://www.city.tondabayashi.lg.jp/site/nishikooriyoutien/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

大阪府富田林市の2年保育の公立幼稚園。周囲はツバメが行きかい、自然豊かである。園児数は約20名の小規模園で、家庭の教育力は高く子どもも穏やかに育っている。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

2014年度、最初はビオトープを作ろうとしたのではなく、「園にもツバメが飛んできてほしい」「オタマジャクシが喜ぶ家を作りたい」という子どもたちの思いから試行錯誤して作った小さな水辺。そこから園庭ビオトープが始まり、その後も子どもたちから子どもたちに自然への気付きが受け継がれ、園庭ビオトープが発展していった。

取組の概要

🌿 取組の内容 施設や場の特徴、プログラムの特徴

〈園にもっとたくさん生き物が来てほしい〉

園庭に生き物が集まり幼虫の羽化の瞬間に出会えるなど、様々な自然や生き物に心動かされ、愛着を持ってきた5歳児。もっと生き物が来てほしいとビオトープ池を拡充する。穴を掘る中で石や土の質に気付き、水が溜まる方法を友達と考え合い、実際に試し失敗を重ねながら作り上げていく。「生き物のために」という思いが友達と試行錯誤し自分たちで作ろうとする姿につながった。それらを教育活動の中で人形劇にする。子どもたちは今までの体験や気付きを振り返りストーリーを考えた。それぞれが生き物の気持ちを想像しながら、なりきって表現する楽しさを味わった。



〈これはドジョウ？〉

園の水路でオタマジャクシを見つけ、水がなくなる前に生き物をすくってはビオトープに引っ越しさせていた。ある時、見たことのない生き物を発見する。何という生き物か図鑑で調べ、観察しながら絵に描いたり家族に聞いたり数日間調べた結果、「ドジョウでは？」ということになった。地域の里山を管理されているTさんに聞いてみることにする。子どもたちは『これはドジョウなのか？』『ドジョウならビオトープに入れてよいのか？』『何を食べる？カエルさんとかは食べないのか？』など考えを出し合った。Tさんから「これはドジョウだよ。珍しいから大事にビオトープに入れてあげて」と教えてもらい、皆でビオトープにドジョウを放流した。その後も、拡充したビオトープ池に仲間が増えるよう、地域の祖父の田んぼに生息するメダカやホウネンエビなどの生き物を幼稚園に連れてくる子どももいた。

このように、園庭ビオトープの自然は子どもの主体性を引き出し、気付きや思考を巡らせ、時には課題にぶつかりながら、より良い方法を考えたり、様々な方法で表現したり、子どもの学びや育ちを引き出してくれている。思わぬ発見にも興味をもちその生き物に関心を寄せ、ビオトープに入れた後の生態系も考える姿は、日々の生活で自然観を育み、生命を感じながら探究を重ねているからだと感じる。



実施体制について

自然環境教育を教育課程に位置付け、年間計画を立て、日々の保育に活用している。また、大学の先生を講師として自然環境教育やESD（持続可能な開発のための教育）の研修を実施し、教員の自然教育の資質向上を目指している。

安全性への配慮

ビオトープ拡充の際には、水位や橋など子どもたちが直接関わることを想定し配慮した。また、危険な生き物や場所は園児が次の学年に自然に伝え合うなど、子ども自身が生活の中で意識できるようにしている。

地域機関・団体との連携

2014年地域の里山に出掛けた時、管理をされている方に出会い初代ビオトープをつくるきっかけをいただいた。その後も園児の疑問に答えてもらったり里山の在来種を分けていただいたり、園庭ビオトープの充実に携わってもらっている。また、隣接する大阪大谷大学の自然教育コースの先生方に子どもたちに直接関わっていただくことで、子どもたちや教員の自然観を広げていただいている。

取組による効果

保護者への影響

保護者も自然と関わる子どもたちの姿に成長を感じ、ビオトープ拡充の際には一緒に土を掘り丸太を並べ協力をいただいた。

地域社会への影響

「ビオトープの集い」と題し地域の方を園に招待する。園児がビオトープのことを知らせたり、一緒に草花を使って遊んだり、園庭ビオトープに関心をもってもらう機会となった。

取組を通じて全体的な所感

園庭ビオトープに関わる子どもたちは、「なぜ?」「不思議」「発見!」など気付きを広げ、疑問を友達同士で考え、感じたことを様々な方法で表現しながら、豊かな感性と思考力を育てている。自然環境には多様性があり命のつながりを感じられるなど、幼児期に培うべき学びの要素がたくさん含まれ、それは子どもたちの「人間力」につながっていることを実感する。今後も持続可能な社会の創り手となるようESDの視点で、園庭ビオトープで生活する子どもたちがその感覚を積み重ね学ぼうとする体験を大切にしていきたいと考えている。

わかさわん しぜんはともだち

～近隣市町と連携した海の自然体験の機会と場の提供

国立青少年教育振興機構 国立若狭湾青少年自然の家（福井県）

<https://wakasawan.niye.go.jp/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

美しい海、若狭湾に面している福井県の若狭地域。海、山、川、湖といった自然が身近にあり、四季折々の自然に囲まれている。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

自然豊かなこの地域でも、子供たちが「海」と触れ合う経験はそれほど多くない。地域の特色でもある美しい海や自然で自由に思いっきり遊べるような機会と場を提供したいと考え、近隣の幼稚園、保育園、認定こども園と連携し、年長児を対象とした日帰りの事業「わかさわん しぜんはともだち」を実施している。

取組の概要

🌿 取組の内容

「わー！きれい！」「キャー、冷たい！」ライフジャケットを着た子供たちは、大きな声を上げながら砂浜で裸足になり海に入っていく。少し進むと、「浮いた！」、足が届かなくなる。そのまま沖に向かって泳いで行く子、あわてて戻る子、浜から様子を見ている子など、海との関わり方は様々である。イカダにたどり着いた子に「飛び込んでごらん！」と声を掛ける。ためらいながらもジャンプ！その楽しさに何度も繰り返し飛び込む。海を怖がっていた子も友達が楽しそうに遊ぶ姿を見て、いつの間にか一緒に沖に行っていた。タイドプールという岩で囲まれた人工的な潮だまりには、ヤドカリやカニ、貝がたくさんいる。岩の奥まで手を入れて夢中になって探している子、深くなっているところで浮いている子、捕まえた生き物を観察している子、ここでも子供たちの姿は様々。このような海での体験に加え、秋には山でのハイキング、冬には、園の地域の自然を活用した体験も実施し、子供たちが自然と触れ合える機会と場を提供している。



🍃 施設や場の特徴、プログラムの特徴

砂浜とタイドプールという環境の異なる活動場所を準備する以外、特に遊具などはない。諸感覚を最大限に使って自然の中で遊ぶことを大切にしたいと考えている。10時から14時半までの間、園ごとに子供たちの様子を見ながら、活動場所を移動したり、休憩をしたり、昼食をとったりしながら過ごす。ゆったりとした時間があることで、工夫したり、挑戦したり、繰り返したり、一人ひとりが思い思いに、また、友達と一緒に自然と関わることができるようにしている。

🍃 実施体制について

先生方を対象とした1泊2日の研修の機会も設けている。シーカヤックや無人浜のテント泊、野外炊事などの体験を通して、子供の頃に戻ったように自然の中で夢中になれる機会を提供し、子供たちが感じているドキドキワクワクする思いに想像を巡らせ、子供たちの気持ちに寄り添える指導者の育成を行っている。

🍃 安全性への配慮

ライフジャケットを全員が着用し、飛び込んだり、波にもまれても、必ず浮くという安心感があることで、大胆に遊ぶことができる。また、各園に1名以上の当施設職員を配置し活動に寄り添うとともに、全体が見渡せる場所への監視者の配置や救助艇の待機により、不測の事態にも備えている。

🍃 地域機関・団体との連携

近隣市町の保育や幼児教育担当部局及び各園と連携し、福井県小浜市、若狭町、高浜町の全ての年長児が参加している。高浜町は、地元の若狭高浜観光協会が主体となり、国際認証「ブルーフラッグ」認定を受けた若狭和田ビーチで海の体験を実施している。

取組による効果

🍃 子供・保護者への影響

子供たちには、海の体験の前後で、海の絵を描いてもらっている。体験後の絵は、人が描かれていたり、海の中に人を描いたり、体験を通して気付いたことや感じたことが生き生きと表現された絵が多くなっている。



🍃 地域社会への影響

事業を通して先生からは「山や海に行くことで、保育士が更に積極的になり、園の周りの身近な自然はどこにあるのか、どうしたら楽しめるのかを常に考えるようになった」という感想が聞かれた。今後も、身近な自然にも目が向いていくようになることを願い、この事業を継続していきたいと考えている。

取組を通じて全体的な所感

自然の家は、「子供を野山に放牧しよう」という考えで設置された。その考えを大切に、自然の中で子供たちが自由に遊べる機会と場になるように心がけている。この体験を通して、地域の自然の豊かさに気付き、地域に愛着を持てるようになることを願っている。

企業社有林を活用した 森の子育て広場「森の hahako 園」

森の hahako 園（群馬県）

<https://www.facebook.com/morinoahakoen/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

hahako 園を始めた当時（2012 年）、0 歳から 3 歳頃までの未就園児の子と親が過ごす遊び場は、地域では児童館など室内に限られていた。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

せっかく自然豊かな土地に暮らしているのだから、子どもたちといっばい自然の中で遊びたい、そして何より、悩める子育て期をひとりで抱えるのではなく、仲間と一緒に見守りながら“みんなでみんなの子どもを育てる暮らし”を作っていきたい、そんな思いを共有する母親が中心となり、外あそびのサークル活動が始まる。

2013 年暮れ、近所にあったサンデンフォレスト（サンデンホールディングス株式会社の事業所）と知人を通じて知り合った。サンデンフォレストは、環境教育の場として学校含む団体を年間 130 団体程受け入れているほか、環境教育等促進法に基づく「体験の機会のある場」(*)の認定を行政から受けており、一般の方に開かれた場所としてのフィールド整備を体系的に行っている組織であった。活動の主旨に賛同し、すぐに「共催」という形で、2014 年の年明けとともにスタートした。

※環境教育等促進法に基づき、土地・建物の所有権等を有する国民や民間団体が、その土地・建物で体験活動を提供する場合に、申請に基づき、都道府県知事等が認定・周知する制度

取組の概要

🌿 取組の内容

活動日は月 2 回。参加は自由で、会員登録や事前申込みは不要。いつ来てもいつ帰ってもいい場所、気軽に寄れる空間を作っている。

🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

お昼ごはんは、おにぎりとお椀 1 杯分の野菜を持参し、お味噌汁は皆で作る。決まったプログラムはなく、そこに来た人のペースで、お散歩したり、松ぼっくりで遊んだり、絵本の読み聞かせをしたり、ゆったりとした時間を自由に過ごす。自主企画でワークショップを開催することもあり、ものづくり、わらべうた、助産師さんのお話し会など、内容は多岐にわたる。サンデンフォレストは、自動販売機工場が中央にあり、その周囲を森



が取り囲んでいる。不審者の侵入や子どもが道路に飛び出すといった心配がなく、周囲の目を気にすることなく、思いっきり子どもを解き放つことができる。

実施体制について

自主保育サークルとフィールド所有者（ここでは会社）との役割分担は、プログラム運営＝自主保育サークル、事務局＝フィールド所有者という形である。フィールド所有者が、場所貸しに徹してしまう



のではなく、ここでは、hahako 園の運営メンバーとともに企画について話し合い、意図を理解し、書類作成や問合せ対応などを担当している。両者一方が欠けても成立しない、皆が共に作り上げる一員であることが活動を継続していく上で大切なことであった。

安全性への配慮

施設内は、母親目線で危ない箇所を確認し、柵を取り付けたり、高いところに上らないようロープをはったり、通常使用する箇所は定期的にチェックを行っている。自然の中での活動は危険も伴うが、自然の中に身を置いて遊ばせること＝親自身が責任を負う（基本は自己責任）ことを初めて来た人に必ず伝えるようにしている。

地域機関・団体との連携

参加者自身のネットワークによるところが大きく、県内で活動する森のようちえん・自主保育サークルに呼びかけ、「森の hahako フェス」の出展団体として一緒にイベントを実施している。

取組による効果

子供・保護者への影響

取組がスタートした当時参加していた子どもたちは成長し、その弟妹が仲間入りしたりと、子どもの年齢層も幅広くなっている。普段の hahako 園に参加できる方は限られているので、hahako 園を卒業した子どもや hahako 園に共感する地域の方が交流できるイベントも定期的実施している（森の hahako フェスなど）。来場者が 400 名を越す会もあり、活動はゆるやかではあるが、誰かが無理をするのではない、信頼関係に基づく子育てを越えた仲間づくり・地域づくりに発展していった。

地域社会への影響

社員の家族も参加するなど、企業内での認知度も高い。テレビや新聞の取材を受けるなど、マスコミに取り上げられることも多くある。

取組を通じて全体的な所感

一番大切にしているのは、自主性。イベントとなると「主催者－参加者」の構図ができてしまい、どうしても参加者が受け身になってしまう。この森の hahako 園は、参加者がその場に積極的に関わり、頼り頼られ、自分の子どもだけでなく、皆と一緒に助け合いながら子育てをしていく場を目指している。

持続可能な社会を支える人材づくり支援、 三富今昔村(コミュニティ・プラットフォーム)で体験型環境教育

石坂産業株式会社 三富今昔村 くぬぎの森環境塾 (埼玉県)

<https://santome-community.com/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

里山の荒廃化、自然の中の遊び場の減少や公園ルールの厳格化により、親子で身近に遊ぶ場所やアクセスできる自然が減少している。また、地域との関わりや地域特有の歴史・文化への触れ合いも希薄になっている。

🌿 取組の経緯・背景・理念等

江戸時代から続く武蔵野の景観美の保全再生し、自然の中で楽しく遊び学べる里山教室を整備し、「体験の機会のある場」の認定を取得し、地域の多くの人々が集う里山コミュニティの交流広場を創出している。地域固有の自然史や歴史文化を共有し、未来の子供たちにつなげる取組である。

取組の概要

🌿 取組の内容

体験の場となる施設内で、生物多様性の保全エリア、美しい景観美を創るエリア、手を掛けず里山が変遷していくエリアに分けて管理している。各エリアには、散策できる園路を整備し、さらに、自然の恵みや昔の文化・知恵に楽しく接することのできる設備や、里山を活かした環境教育体験プログラムをつくり、様々な世代の方が遊び学べる空間を提供している。自然と生活が分断されている現社会において、気軽に多用途で訪れることのできる身近な自然空間や、大人同士の交流のプラットフォームとしても機能している。

🌿 施設や場の特徴、プログラムの特徴

親子で自然の中で遊び、学び、楽しめる空間を整備している。施設内にはアスレチック、落ち葉プール、子どもの水辺、親水池、ミニSL、ベンチのある憩い広場、デイキャンプ、地域の歴史文化を継承する昔の暮らし体験(紙芝居、水車、触れられる農具、落ち葉堆肥発酵熱の足湯)を設け、遊びの中から自然の恩恵や畏怖を学ぶことができる場を用意。また、一部危険を取り除かないあるがままの自然を残し、経験によって危機回避能力等を身につける意図を持つ場所もある。単に自然観察やスタッフから話を聞くではなく、幼児自らが興味・関心を抱く遊具など遊び場を設けており、自然に親しみや関心を持ち豊かな心を育むことや、同年代・異年齢とのグループ交流を通じて、秩序を守り協調性や社会性を身に付ける学びの場と位置付けている。



自然・文化体験を子どもの成長過程に合わせ興味関心を持たせる体験プログラムとして提供し、未来を担う人材の育成とともに、元々地域の生活の一部だった里山が現代社会にも必要であるとの再認識を図っている。

実施体制について

くぬぎの森環境塾における運営体制は三富今昔村スタッフと地域の人材である環境ナビゲータで構成されている。社内の専門スタッフは園児の自然体験プログラムに参加し、児童への接し方や教え方も学んでいる。森のガイドウォークを行う際は森林インストラクター資格を持つスタッフの下で実施。2014年にISO29990学習サービスを取得し、規格の要求事項（PDCA）に基づきプログラム開発と人材育成を行っている。

安全性への配慮

施設は「体験の機会の場」で求められる安全を確保し、埼玉県による認定更新時の現場確認があるほか、スタッフによる定期的な場内巡視を実施している。児童の親や先生向けに危険生物を教えるハンドブックを制作している。プログラム実施時には冒頭で説明し周知。また、緊急対応として、スタッフが救急救命訓練受講しAEDの使い方などを学び、救急セットを各所に備えている。

地域機関・団体との連携

埼玉県からは、環境学習応援隊事業に基づく学校に対する環境教育の支援・周知の協力や体験の機会の場の認定を受けている。また、当社が所在する三芳町と地域振興の包括協定を締結し、親子体験プログラムや環境イベント等相互協力の関係を築いている。その他、地域のこどもエコクラブ、学童、周辺の保育園や幼稚園などの子ども団体より遠足や野外活動の場としてフィールドが活用されている。

取組による効果

子供・保護者への影響

2016年交流プラザのオープン以降、地域のコミュニティ、家族3世代など、幅広い世代に憩い・集いの場として年間4万人に利用されている。特に、幼稚園や保育園の遠足利用数は昨年度20団体740名の利用と年々増加している。来場者からは子どもを自然の中でのびのびと遊び楽しませることができ良かった、今後も四季を通じて自然を楽しませたい、とのことでリピーターが多く、年間4万人の来場につながっている。

地域社会への影響

子ども達の成長につながる学びの場としての機能だけでなく、ベビーカーを押してママ友が集まり、自然の中で交流する広場、社員も含め地域への貢献意欲を向上させるきっかけとなっている。また、同業者や見学会に参加した関係企業より、体験の機会の場の認定を取得したい、地域の自然保全と体験活動を行いたいとの声を頂いており、企業の在り方、意識の広がりにつながっている。

取組を通じて全体的な所感

これからの未来をつくる子どもたちが、持続可能なマインドや感性を醸成するにはまずきっかけづくりが必要である。そこから得た小さな気付きの積み重ねが子どもの生きる力、考える力、そして持続可能な未来につながっていくと信じている。

持続可能な社会の構築と環境教育について

環境省大臣官房総合政策課環境教育推進室 端山耕司

我が国は、少子高齢化や、地方から都市への若年層を中心とする流入など、地方の若年人口、生産年齢人口の減少が進んでいる。このことは、耕作放棄地や手入れの行き届かない森林の増加、生態系サービスの低下などにつながっているなど、環境保全の取組にも影響を与えるものであり、環境、経済、社会の問題について、統合的な課題解決による地域の統合的発展が必要とされている。一方、世界でも、2015年に、国連において、持続可能な開発目標（SDGs）（図1）を掲げる「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されるなど、大きな動きがあった。

こうした国内外の動向を踏まえ、2018年に策定された第5次環境基本計画では、国全体の持続可能性に向けて各々の地域が持続可能である必要性がとりあげられ、地域がその特性を活かした強みを発揮し、地域ごとに資源が循環する自立・分散型の社会を形成しつつ、より広い広域的ネットワークを構築し、支え合う「地域循環共生圏」（図2）を創造して、持続可能な地域社会を構築する構想が掲げられた。



図1 持続可能な開発目標（SDGs）
出典：国連広報センター



図2 地域循環共生圏

環境教育は、環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律において、「持続可能な社会の構築を目指して、家庭、学校、職場、地域その他のあらゆる場において、環境と社会、経済及び文化とのつながりその他環境の保全についての理解を深めるために行われる環境の保全に関する教育及び学習」と定義付けられており、持続可能な社会作りを目指す SDGs 達成や地域循環共生圏の創造と、目的を共有する。また、我が国の環境教育は、持続可能な開発のための教育（ESD）と一体的に推進している中で、ESD について、2017年のユネスコ国内委員会において、「教育はSDGsの目標4に位置付けられており、ESDは目標4の中のターゲット4.7に記載されている。しかし、教育については、『教育がすべてのSDGsの基礎』であり、『すべてのSDGsが教育に期待』している、とも言われてます」とされた。さらに、2019年12月には、国連でESDのこれから10年の推進枠組みとして「ESD for 2030」が採択され、ESDについては、SDGsの実現のための人づくりであることが明確となったところである（図3）。このように、環境教育の目的

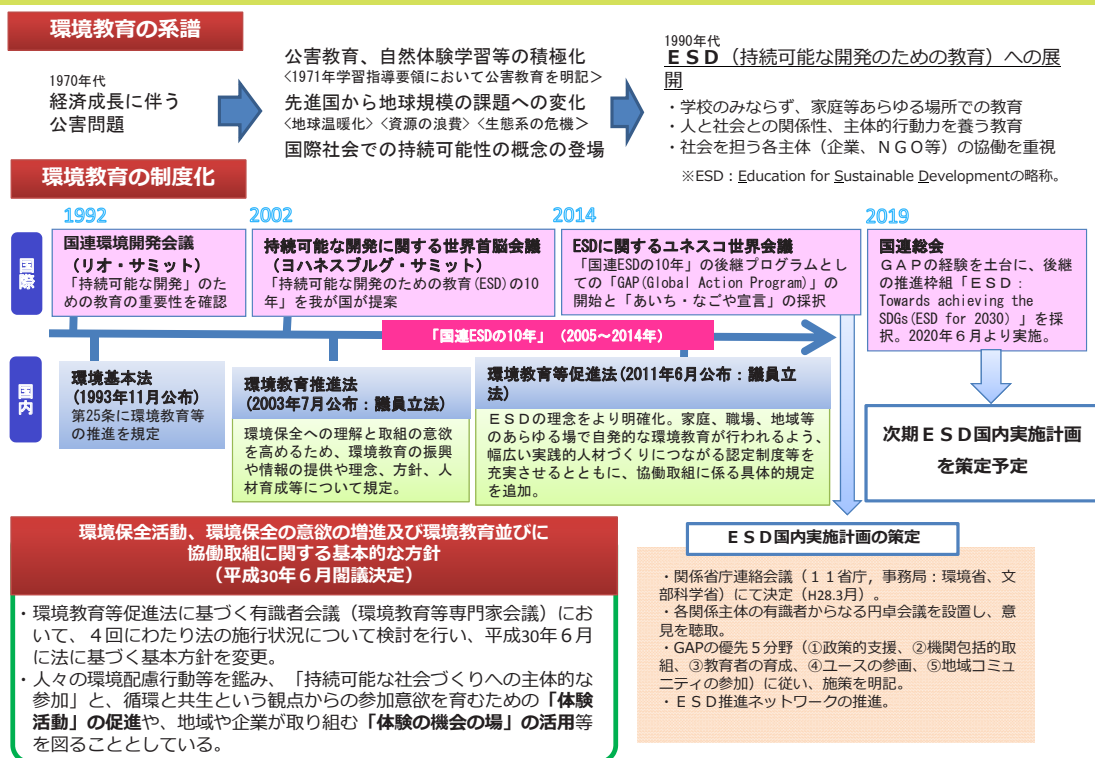


図3 環境教育推進方策

に、SDGs 達成や地域循環共生圏のための人づくりの観点に加わりつつ、環境教育に対する期待は、近年増大している。

環境教育の内容に関する最近の動向を、平成30年6月に改定された環境教育等促進法に基づく基本方針を見ると、環境教育の方向性として、「持続可能な社会づくりへの主体的な参加」と、循環と共生という観点からの参加の意欲を育むための「体験活動」の促進が重要であるとされている。「体験活動」の内容は、自然体験だけでなく、持続可能な社会づくりを支える現場に触れる社会体験、日常生活と異なる文化や慣習等に触れる生活体験、ロールモデルとなるような人との交流体験といったように、広い視点から捉えている。また、「体験活動」のプロセスも、感性を働かせるインプットだけでなく、その中から見いだした意味や価値を他者に表現するアウトプットまでを重視している。

幼児期における「体験活動」は、自然環境に親しみ、関心や愛情を育むことができ、生涯にわたり持続可能な社会の創り手として育成する基盤を培う教育といえる。一方で、個人の資質・能力の育成という視点だけでなく、森林や里山、田園や河川等の地域固有の自然環境のほか、地域の文化や、地域に住む人々といった多様な地域資源を活かしており、地域の視点を取り入れることで、地域住民や団体等の交流を促進させ、地域そのものの価値や魅力を高めるなど、地域を活性化させる力を持っている。このような子育てを核とした地域づくりは、例えば、都市部からの若年世代の移住促進や、地域間の交流促進などにもつながっており、少子高齢化や若年人口の減少といった課題を抱える地域において、持続可能な社会づくりという観点から、更に幼児期の環境教育の取組が広がり、充実したものとなっていくことが期待される。

幼児期における環境教育体験活動事例集～環境教育で持続可能な地域へ～

令和2年3月発行

発行／環境省大臣官房総合政策課環境教育推進室

〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2

電話 03-5521-8231

印刷／株式会社 三州社